

内 羽地村沿岸

1. 調査場所及び期間

場 所 羽地村仲尾次、真喜屋、稻嶺、源河地先

期 間 1956年6月22日～23日 2日間

調査方法 海中採査及び漁民部落より聞き調査

2. 生 産 調 査

類 別	採 査 期	年間生産高 及び 量 数	利用状況の述衣	備 考
海人草	7月～8月	生9-0.3斤位	島内販売	村落間による貿易
も づ く	2～3月～4月	1.00斤位	自家用	特産にはは製団に繁茂するが利用 者なし
い ぎ す (モ一井)	1. 4月	40斤位	自家用消費	主に真喜屋製団地外に多い。
な ま こ	同 年	4.00斤位	々	製団より平産なる製団地
ばふんうに	5月～7月	不 明		真喜屋製団地

3. 調査地区内に於ける水産加工業及養殖業の有無

海人草養殖場 稻嶺源河地先 1954年頃村経営に依り継続

なまこ煙製処理場 仲尾次 個人 上地源保氏

4. 調 査 経 過

イ. なまこ資源について

なまこ類は稻嶺、源河一帯が主産地で豊富に採獲し其の種類もじやのめなまこ(俗称みーはやー)しびふじなまこ等が主で其の外に(俗称 あかーうるかーくよわーかじまる)等と7種類位あるようで業者は其の採捕に底曳網を使用している。

戦前は仲継でも「羽地なまこ」と賞讃され遠く支那、台湾にも輸出されたが現在では僅かに島内消費に過ぎず、簡易煙製品として製菜程度に使用されている。

ロ. 琉球もづくについて

真喜屋稻嶺地先の砂灘地帯に廣範囲に繁茂し、一時商人により利用されたが其の後利用者なく地元民は養豚飼料程度に使用し放置状態にある。戦前同様塩蔵もづくとして輸出出来れば有望な生産品として期待し得よう。

ハ. いぎす(俗称モ一井)について

6月現在皆無の状態にあるが、春先に多く繁茂し盛漁期には地元民はこれを日乾して貯蔵し置き「ヒこみてス」の様に凝固物を製して豆座代用として常食してゐるそうである。此のほか、糲料とし或は味増廣して食用に供されている。

ニ. 海人草について

天然産の海人草は見受らなかつたが、源河に村経営の養殖場がある。総坪数

30,000坪、内 8,000坪は養殖済 22,000坪は未利用のままとなっている。10月頃に投石6月迄に9ヶ月経過しているが、体長平均2寸5分程度で原産揃ひ品質も良好に思はれた。尙、吾河川を控えた養殖適地で昨年の収穫乾燥して 3,000斤位を得、相等待しているようである。

ホ. 貝資源について

同地区沿岸は殆んど傾斜面の緩やかな砂泥混りの底質を有し、又陸地より河水が流入し、本所給養殖試験適地としても一時使用した所もあり、管理を充分に行うならば有月貝類の養殖適地であらう。現在すまひらがひ、はそすじがひ、いなみがひ、すりがはさかねがひ等が見受けられたが比較的少なく、あまり利用されていない状態にある。

分 布 略 図

